

1. 大淀川の概要

1.1 流域及び河川の概要

大淀川は、その源を鹿児島県曾於郡末吉町中岳(標高 452m)に発し、北流して都城盆地に出て、霧島山系等から湧き出る豊富な地下水を水源とする数多くの支川を合わせつつ狭窄部に入り、岩瀬川等を合わせ東に転流して高岡町に出で、最大の支川本庄川を入れて宮崎平野を貫流し宮崎市において日向灘に注ぐ、流域面積 2,230km²、幹川流路延長 107km の一級河川です。

その流域は、宮崎県の南西部に位置し、鹿児島、熊本、宮崎の三県にまたがり、5 市 17 町 2 村が含まれ、社会、経済、文化の基盤をなしているとともに、流域の一部が霧島屋久国立公園、九州中央山地国定公園の指定を受けるなど自然環境や景観も特に優れています。

流域内の人口は約 60 万人(河川現況調査 調査基準年平成7年度末 平成 15 年 3 月 九州地方整備局)です。

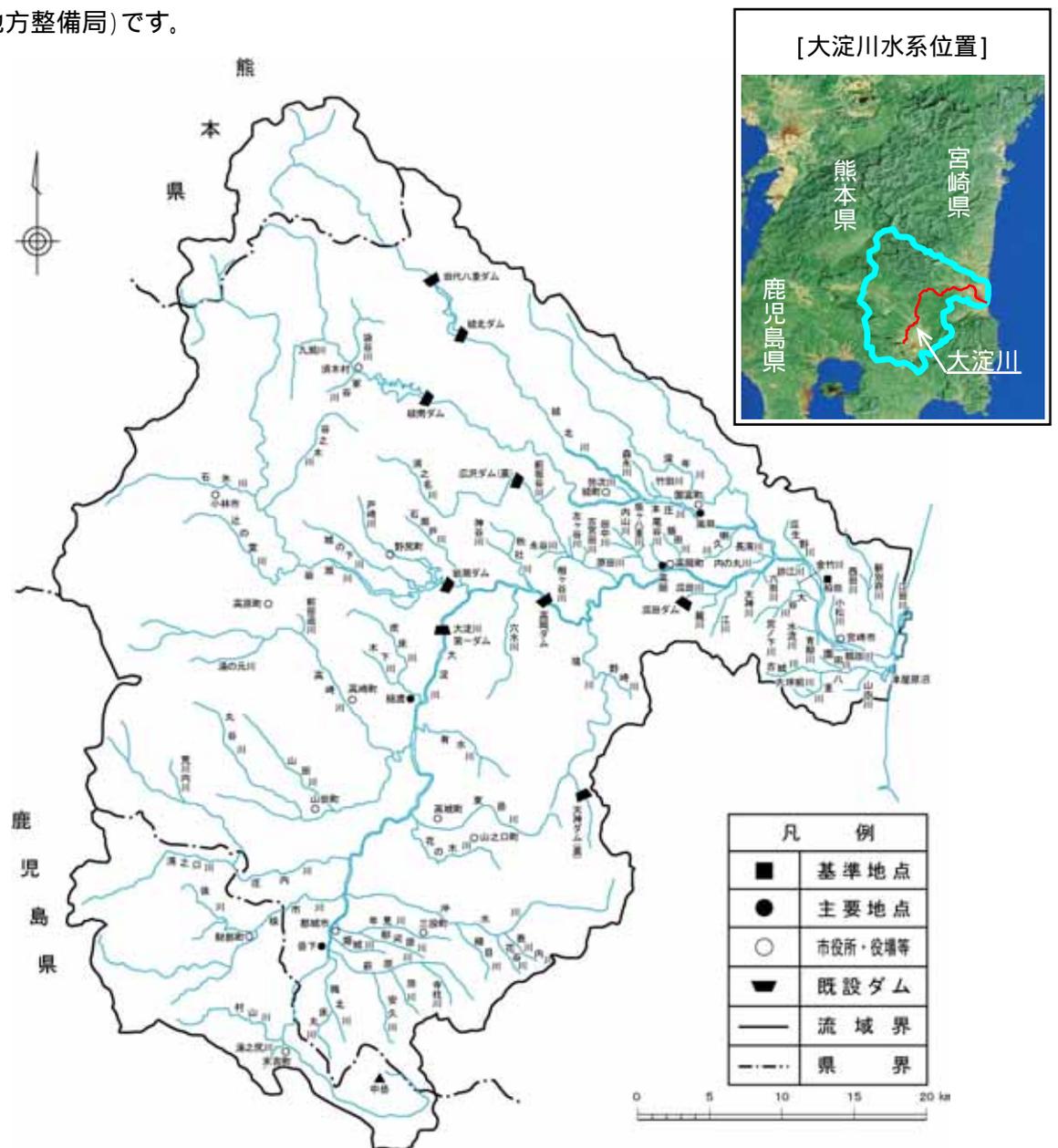
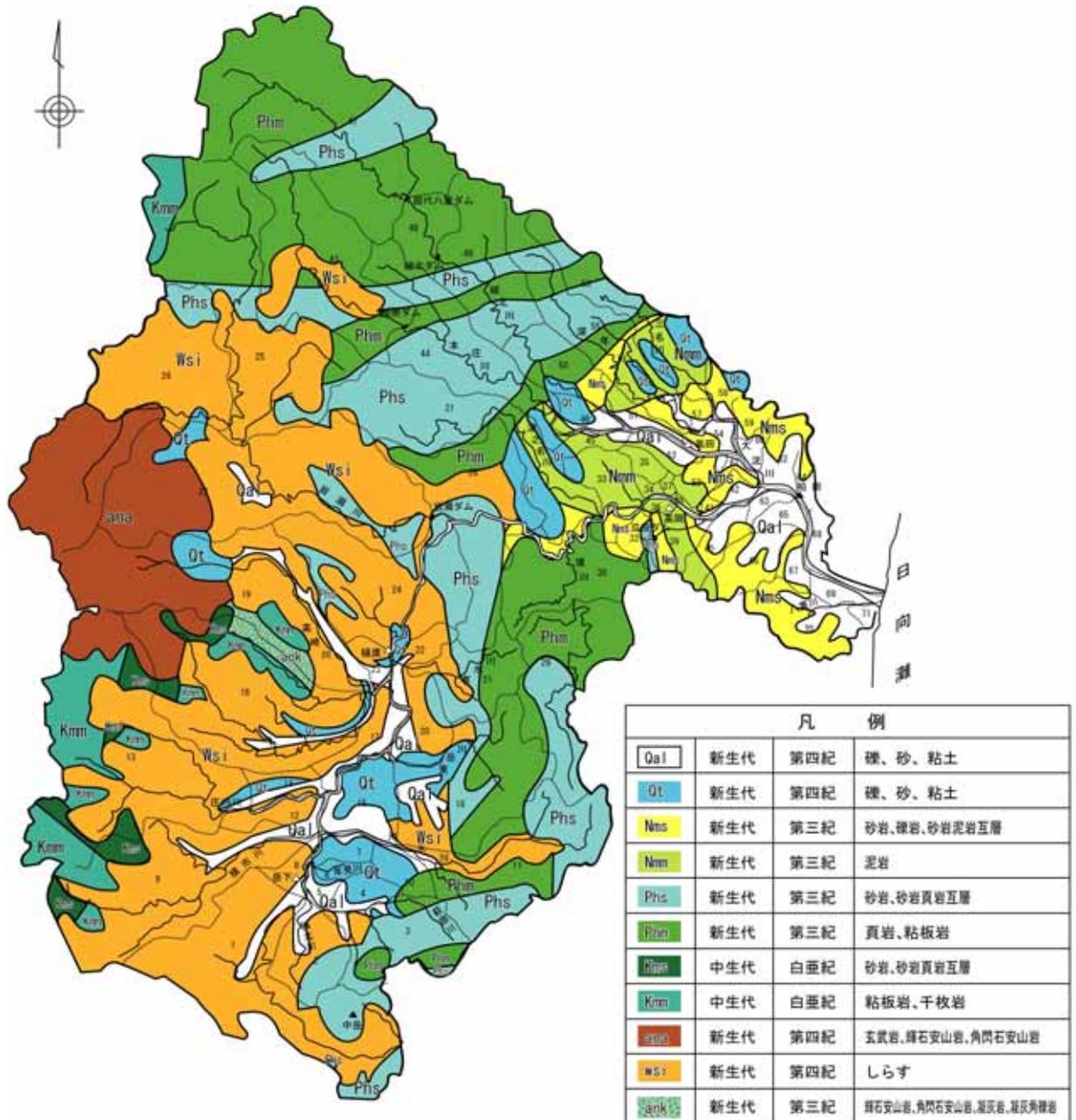


図 1.1.1 大 淀 川 流 域 図

大淀川流域は東西約 55km、南北約 70km で、やや長方形をなし轟^{とどろ}付近の中流狭窄部を境とした上流域と下流域に分けられます。都城市を中心とした上流域の盆地は鱒塚^{わにづか}山地と霧島火山部との間にあり、盆地内にはかなり広いシラス段丘^{ちゅうせき}とが発達しています。下流域は広い沖積平野を形成し、宮崎平野の主要部を成しており、北西から流下する本庄川を合流し、日向灘に注いでいます。

流域の地質は、上中流部に四万十層群^{しまんと}が広く分布し上部には灰白色で火山噴火物のシラスが厚く堆積しています。また、下流部では川筋に砂、粘土などを含んだ沖積層が分布し、河口部や海岸沿いには基盤である宮崎層群の岩盤が露出しています。



出典)「九州地方土木地質図
(九州地方土木地質図編纂委員会)」

図 1.1.2 大淀川流域地質図

大淀川流域の気候は下流域が南海型気候、上流域(本庄川流域含)が山地型気候に属し、海岸地方では年平均気温が約 17℃ であって、日本で最も温暖な地帯に属しています。しかし、山沿いの地方では年平均気温が 15℃ 以下となり、霧島山系のえびの高原では冬季の最低気温が氷点下 20℃ 以下に下がることもあります。また、流域年平均降水量は 2,700mm 程度であり、霧島山系と鱈塚山系は 3,000mm を超える多雨地域となっています。月別では 6 月～7 月の梅雨期及び 8 月～9 月頃の台風期に集中しており、特に台風が本流域に与える影響は大きく、既往の大洪水のほとんどが台風によるものです。



図 1.1.3 気候区分図

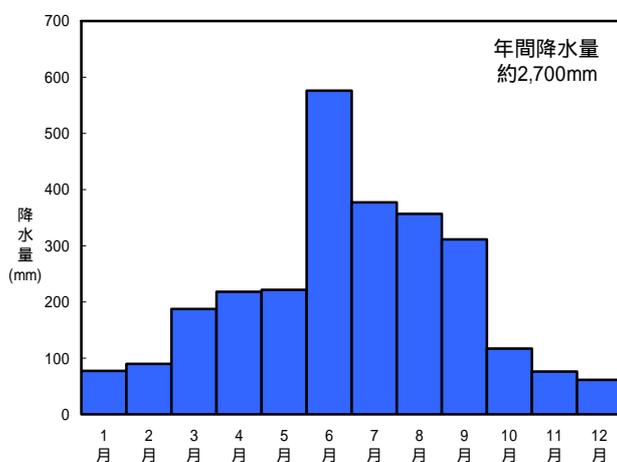


図 1.1.4 大淀川流域の月別平均降水量 (1990年～2003年の平均)
(国土交通省宮崎河川国道事務所調べ)

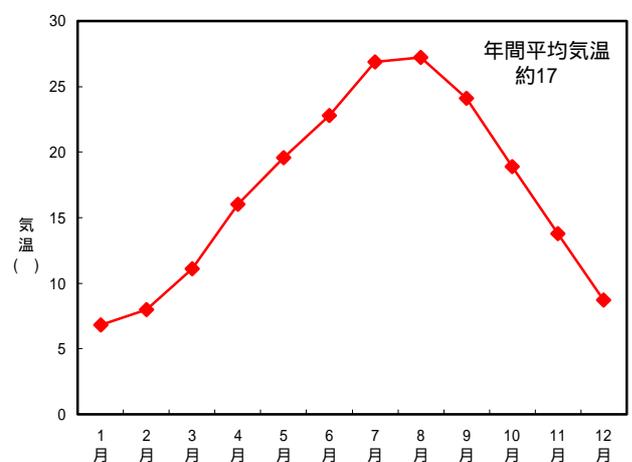


図 1.1.5 宮崎気象台における月別平均気温 (1961年～1990年の平均)
出典)「理科年表国立天文台編 2001」

流域の自然環境は多様性に恵まれています。源流部は、鰐塚山地の南東部で、スギ・ヒノキ等の人工林で覆われ、そこにはあまり高い山地はなく、400～500m級の台地や丘陵となっています。また、上流部を形成している都城盆地は、鰐塚山地と霧島火山部との間にあり、盆地内にはかなり広いシラス段丘と沖積台地が発達しています。畜産の盛んな都城盆地では、河川の高水敷は一部牧草の生産の場所として有効に利用され、草原性の植生が色濃く、チガヤ - ススキ群落、キンエノコロ - メヒシバ群落、ネズミギなどが広い面積を占めています。都城盆地と宮崎平野を結ぶ日向山地と鰐塚山地に挟まれた中流狭窄部は、豊かな自然が残されており、自然林と人工林が混在する険しい地形であり、宮崎の河川を代表する大淀川本来の原風景を見ることができる貴重な区域です。場所によっては、樹齢100～300年の森林風景を見ることができます。また、支川岩瀬川にのみ生息するオオヨドカワゴロモ(小林市:天然記念物)が確認されています。県都宮崎市街地の中心部を流れる下流部では、都市化が進み人為的環境が色濃いものの、河口には、魚類相の頂点に位置するアカメが生息し、その生態系を維持するための豊かな生物環境が保持されています。また、まとまったヤナギ群落やワンド、人の立ち入れない中州、通称「丸島」^{まるしま}にはサギ類のコロニー、カモ類の休憩地が残されています。大淀川河口の砂浜には絶滅危惧類のアカウミガメが毎年産卵のため上陸し、宮崎県の天然記念物にも指定されています。さらに、大淀川最大の支川本庄川流域においては、日本有数の「原生の照葉樹林帯」など豊富な森林資源を上流に抱え恵まれた自然環境から、九州屈指の清流で豊かな生態系が形成されています。



写真 1.1.1 大淀川本川上流
都城盆地を流れます。



写真 1.1.2 大淀川本川中流
日向山地と鰐塚山地に挟まれた狭窄部を流れます。



写真 1.1.3 大淀川本川下流
宮崎市街部を流れます。



写真 1.1.4 本庄川

流域内の土地利用はその大半を山林と農地が占めその割合は約 87%となっています。また、下流部宮崎市では、近年都市化、宅地化の進展が著しく、宮崎市の人口は平成 16 年 3 月時点で約 31 万人に達しています。

流域の産業は、温暖な気候と大きな盆地、広い平野、豊かな森林に恵まれていることから農業や林業といった第一次産業が盛んで、就業人口の約 1 割が従事しており、これは全国平均の約 3 倍近い比率となっています。また、水産業については、スズキ、シラスウナギ、アユ、チヌ、ヤマメ等を中心とする内水面漁業が盛んです。

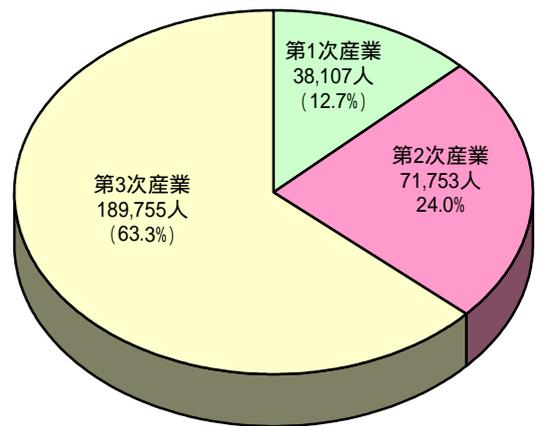


図 1.1.6 大淀川流域の産業別就業人口構成図
出典)「河川現況調査(調査基準年平成 7 年度末)

河川水は、農業用水として約 25,000ha におよぶ耕地のかんがいに利用され、また、大正 15 年に建設された大淀川第 1 発電所をはじめとする 12 箇所の発電所(総最大出力約 240,000kw)の発電用水及び宮崎市等の上水道用水に利用されています。

大淀川は、かつて道路や鉄道ができるまでは舟運しゅうんが多くありましたが、今では水遊びの場やいかだ下り等に利用されています。

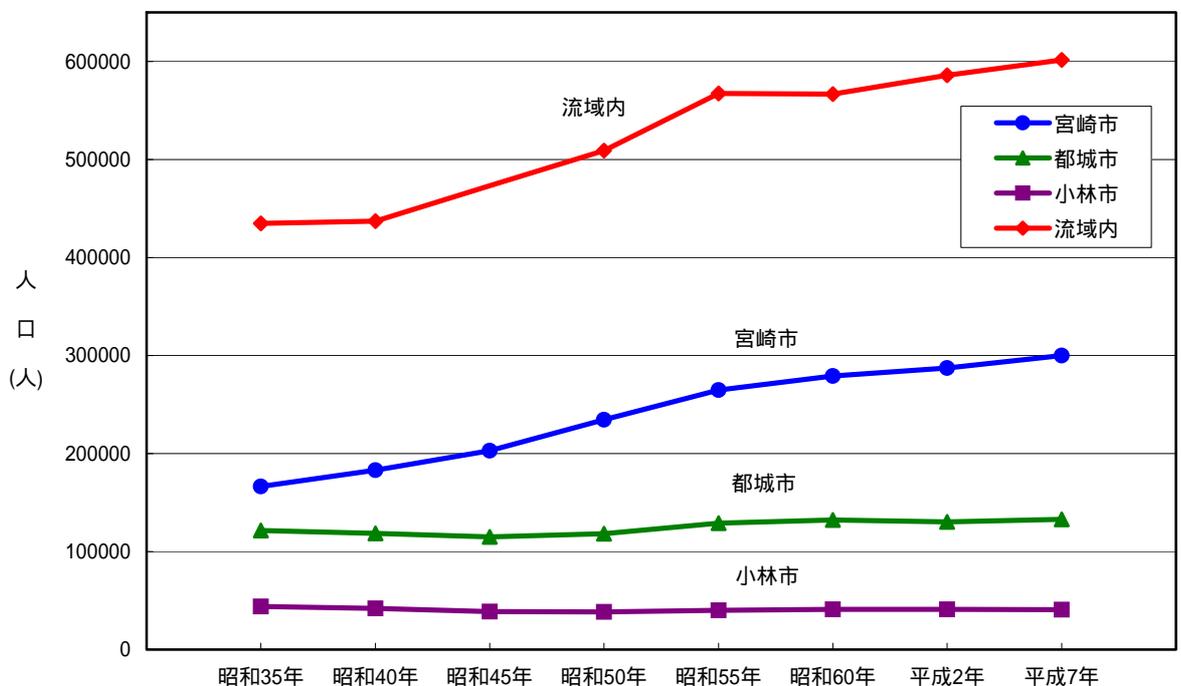


図 1.1.7 宮崎市、都城市、小林市こばやしにおける人口の推移